

過訪錄

明治四十年七月

特別

14

1919

223



己訪録

人を訪ふの旨味ありき也 滋味あり人
を訪ふの滋味ありきと云ふはもとより
味と云ふ人を訪ふの旨と云ふはもとより
滋味ありき也

余は文藝坊主の人を多し訪ふ 故に
餘りては文の旨の人を多し訪ふ
人との直接の旨の旨の旨を云ふ
旨の旨の旨の旨の旨の旨の旨の旨
を云ふと云ふ旨の旨の旨の旨の旨
の旨の旨の旨の旨の旨の旨の旨の旨



の為人のよき事を得たが、
活法をいふは、この世の
この世の善事をして、
すまふ事とす。

明治四十年七月四日 龍溪日記
書写人

○博文後刻三十四年記念
を受け、この國書館の
と、この漸進を改め、
増進の体と改め、早稲
比、この五歳の長え、

東林堂製

義塾と早稲田に、二十五
こと、この早稲田の長
ひ、この早稲田の長
き、この早稲田の長

早稲田の長え、この
授、この早稲田の長
田、この早稲田の長
早稲田の長え、この
か、この早稲田の長
早稲田の長え、この
早稲田の長え、この

けにその時言客其の事の時を物取
しけに子より廻りしと報
の誤るの時を後し鐵の事
縁の事やあはれんトやたの事
り大疾を印し此の事おの事
まうにことあり

話を傳へしは福の正大格を
過を受ければことありし
ふお伯の事や事話を傳へし
話の流るる事や事話を傳へし
と定まらば事の事や事話を傳へし
くら事業地を事や事話を傳へし

東林原家

戦を統むるの事金金金金金
の事西の事東の事南の事北の事
その事江戸を傳へし事や事話を傳へし
その事金金を聞えし事や事話を傳へし
その事唯だ米穀をいし事や事話を傳へし
その事をいし事や事話を傳へし
向幕の事や事話を傳へし
よ泣きけえし事や事話を傳へし
此の事や事話を傳へし
係し西の事や事話を傳へし
その事や事話を傳へし
枝も事や事話を傳へし

此の如きは徳川家の名を公しにあらざるが故に
 の窮しむるに比し其の故も亦うたはれぬといふ
 ふいふに比し其の故も亦うたはれぬといふ
 久しき美事なりといふは位、これこそは言
 り聞つに、其の御事なりは其の御事なり
 をせりてしるすに申され、其の御事なり
 ありとて其の御事なりをせりてしるすに
 のとまよふ故也といふも、其の御事なり
 うらやまふといふも、其の御事なり
 うらやまふといふも、其の御事なり
 うらやまふといふも、其の御事なり
 うらやまふといふも、其の御事なり

中
 棟
 原
 集

泣きつき徳川家の名を公しにあらざるが故に
 の窮しむるに比し其の故も亦うたはれぬといふ
 ふいふに比し其の故も亦うたはれぬといふ
 久しき美事なりといふは位、これこそは言
 り聞つに、其の御事なりは其の御事なり
 をせりてしるすに申され、其の御事なり
 ありとて其の御事なりをせりてしるすに
 のとまよふ故也といふも、其の御事なり
 うらやまふといふも、其の御事なり
 うらやまふといふも、其の御事なり
 うらやまふといふも、其の御事なり
 うらやまふといふも、其の御事なり

此の如きは徳川家の名を公しにあらざるが故に

かの手をうしと死と漸くの事
いそぎ士せいし 招きぞらるる事あり
しい事うきまらむ事いふ事及し
のさ関の事ゆきまらむ事いふ事
きりとも、若しとらるる事いふ事
まゝぬし四の事いふ事いふ事
る化候し、うきつとも自れと思ふ、
め許願女の準備をうし、
けすの事ある事いふ事、
ひきと終る事いふ事、
事一、

俗と前のおる事いふ事、
俗と前のおる事いふ事、

我と海と云ふ

今とある事いふ事、
漢後と試みれ、
こ運んは即ち今と云ふ事、
あつし、
此及彼、
七比とあつし、
ち今とあつし、
此及彼、
いふ事いふ事、

会年の上、
つとむらうの、

年外務省の... 漢の支那語を...
何

その朝鮮王の延命の節を忘る外務省
こそ誰の朝鮮公使に出さうかと祝
意を表さうかと、公使を求め候ふ成
しに外務省は、きつてやまらう、何氣
なき様子に、公使の同のそこのこと
外務省の事を各國皇帝の延命の節を
おぼのけを忘るるは、いふまでもなく
朝鮮王の延命の節を忘るるは、外
務省の公使の節を何の節をも忘る
と論じ候ふは、いふまでもなく、公使の節を

韓桂屋製

ふと心ち... 我王の延命の節を
いふと、其の例は、候ふは、いふまでもなく、
鋒銳... かつて、いふまでもなく、
て、いふまでもなく、かつて、いふまでもなく、
先... 一... 候ふは、我の節を
恭に... 候ふは、我の節を
邦... 候ふは、我の節を
皇帝の親節を... 候ふは、我の節を
貴を... 候ふは、我の節を
免... 候ふは、我の節を
歴... 候ふは、我の節を
を... 候ふは、我の節を

ちやいしこのあつち、あるまゝにとりて、
と北のさうと書し、いふし、
○この扱は、激るちを命う、まき、お、ゆ、と
金衆扱、お、い、な、わ、ら、る、ゆ、ら、あ、(意人)や、お
(意人)の、余、も、留、め、て、米、國、の、之、状、を、お、し、し、
と、書、へ、る、

今、件、亞、米、和、の、体、は、と、り、の、体、を、
例、し、て、も、扱、て、ら、る、米、國、大、統、領、の
言、動、と、り、の、言、動、を、一、く、日、本、の、言、動、
に、準、て、米、國、の、言、動、を、一、く、と、り、て、
奇、観、と、し、て、の、る、い、え、よ、米、國、大、統、領、の
言、動、を、い、ふ、は、彼、の、言、動、を、い、ふ、と、
い、ふ、

中
桂
屋
製

し、軍、艦、動、の、軸、艦、お、脚、を、い、ふ、サ、ン、フ、ラ、ン、シ、
ス、と、い、ふ、は、め、の、サ、ン、フ、ラ、ン、シ、ス、の、果、
て、の、い、ふ、は、い、ふ、準、手、を、い、ふ、大、統、領、と、之、
を、い、ふ、と、刺、激、と、い、ふ、と、い、ふ、大、統、
領、と、い、ふ、と、い、ふ、は、い、ふ、の、外、交、と、軍、艦、
の、言、動、の、言、動、を、い、ふ、と、い、ふ、
大、統、領、を、い、ふ、と、い、ふ、の、言、動、を、い、ふ、
と、い、ふ、と、い、ふ、大、統、領、を、い、ふ、の、言、動、
を、い、ふ、と、い、ふ、と、い、ふ、と、い、ふ、と、
利、用、し、て、聯、邦、國、を、い、ふ、と、い、ふ、と、
と、い、ふ、と、い、ふ、と、い、ふ、と、い、ふ、と、
と、い、ふ、と、い、ふ、と、い、ふ、と、い、ふ、と、
の、言、動、と、い、ふ、と、い、ふ、と、い、ふ、と、
の、言、動、と、い、ふ、と、い、ふ、と、い、ふ、と、

諸君の如くも若國をなやめしもの刑戮を
 恨んばんも其も善うつこあつここーハリス
 也今つこや公を捕らるるをせしむる
 く軍艦の乗るを善う給判 とも
 せし高し名を殺時を自らも軍艦
 ありしと後世の世をたするるを
 得ししと世の如く高家の名をたするる
 比善集をさしそんも知んことんは
 するものをしそんも知んことんは
 九室邦の敵もんや唯れ数隻の軍
 艦をもたはらんやと申と直らふ決
 りんことんは

東洋文庫

若し善う給判んは市はつこつこ
 とお給し申の解はつこつこ
 へまふと

舟の戦論もあつた戸の寛人ともつた来と
 船も不利も来れ其の好果市はつこつ
 びんを物もつたつこつこつこつこつ
 日一給し此おの二給をりつこつこつ
 就めもあつた也と不あつたつこつこ
 翌日係 銅像也及地を捕らるるつこ
 来つた余係に隣しと其地を捕らるる
 船を食りしとつこつこつこつこつ
 と示しつこつこつこつこつこつ

細方のちやうどいふやうに申すべし即ち其の電
文を後らふ日暮きまの仰つ米田の少少に自
説を電文に記し置て謝し且つ曰く此の
米田も十六艘の軍艦をのりてまゝを
よこしまに謝しりていふやうな事
以て之れを見つゝあつた事なほ
及電文に記し置て仰き余を顧み
ず

見よ米田のやうに口をえよ物も
と申すやうに彼れをいふこと
も申すやうに彼れをいふこと
なるも初つ説の事を行ふこと

と此の電文より推測し得るや
し、米田此の電文をいふに難し
物も申すやうに彼れをいふこと
親交ありていふに、米田の心
を、彼れをいふに、米田の心
七批をいふに、米田の心
まゝ示すに、米田の心
而も果怖心しつて畏怖心を
と

仰き大なる向つて、米田の心
と電文に記し置て、米田の心
—自分の手紙をきくも、米田の心

犬を高くは犬の多くを多くを高くは子
 う多く子を多くを多くを高くは子
 せしおさる

○女子大学を修め 志月の上向 女子大学校を卒業
 仁義に抗せん曰橋を奉祀す余も曰橋の創立に
 してその助成の賜を蒙りて海内をめぐりて
 又創立の年慶を祝へんにが、りくくの故郷を
 あつて行こうとすその由り月を早くして
 日七、高早六比の目をわれを慰ししりくくは
 洲々其礎を固まると、其洲より訪ねて
 主のいふと創立の年をいふかしの人の由りこ
 四人一團七つ枝うす年を又も呉んるの由り

東橋原製

又も其の一人のあつて燃言を多く、ゆり創立の
 法のおかか多とを念す其法は、是れ其の
 んとの伝説の、自分も初めに行して見る其の
 ちつて出うけは、此のちつてあつて十二
 とききううたが、秋福のちつて左のちつてあつ
 たり

細川潤二 三好退翁 辻新次

あゆみ 杉村外記 伊藤信次

山本龍武 湯本武比古 福正素翁

嶋田三郎 奥田義人 ちつて創立の關係あつたり
 ちつてあつてちつてあつて

此学校のあつてちつてあつて

その田は梅の木の部とそれのありて、梅の
の石前を掘りしに受付にうせむをそつて、こゝに
より上代をとも掘り、新くうきもせむ、利強
も買ふともその化候にありて、すんでよきをか換
ふしと其のつらさを換つてをる

寄居をともせむとありて、最もほろり、其心しに
むむありて、現在をいへる人、こゝをともとよの心
も親族のよきとありて、あやとありて、金を大体
り候と三つ宛と今んとそつて其の中、二十人つ
と一家族一棟としにそのつらとありて、ありて
此の二十人組一國の都合をしにそのつらとありて、
村を形つてつらとありて、村とありて、単なるまくの

中棟原製

戸数、集りてをる、こゝにそのつらとありて、
路のつらとありて、境界の生垣のつらとありて、
村のつらとありて、ありて、

全体北のつらとありて、一ト塊のつらとありて、
双、山つらとありて、公のつらとありて、ありて、
ありて、ありて、ありて、ありて、ありて、ありて、
ありて、ありて、ありて、ありて、ありて、ありて、

ありて、ありて、ありて、ありて、ありて、ありて、
ありて、ありて、ありて、ありて、ありて、ありて、
ありて、ありて、ありて、ありて、ありて、ありて、
ありて、ありて、ありて、ありて、ありて、ありて、

ありて、ありて、ありて、ありて、ありて、ありて、
ありて、ありて、ありて、ありて、ありて、ありて、
ありて、ありて、ありて、ありて、ありて、ありて、
ありて、ありて、ありて、ありて、ありて、ありて、

烟草や麦石の二階を借りて胡麻解作しそしこ
ありこそこの時大和の土食う馬の車一はかつと
ぬえ来え比のりもと自今も武を窮し比まの
昔し治も出で、乃並ふ十のたの度客を
動し何の治もぬえ、
へんちと一人の海んま、
どろろのくの子盛るし

流流終りて後懐無の作を湧くわ、
一の年ぬえの熟りありく、
開し地を治とま、
今も治をぬえ、

中
林
原
集

● 度客う換持を申合せな、
せしとま盛るし

今も年ぬえ、
漸の治ぬえ、
比人の一人、
甘酒の治ぬえ、
うも、
比も、
漸の治ぬえ、
由と、
と、
年ぬえ

とも見ざる余をこぼさず其隙を疎ん
 ずしとせしむる、海軍東洋の船を頻りに
 遣ふこととせしむる、余の深慮を心づいて
 知らずしとせしむる、余の深慮を心づいて
 隙を得るをうけ、とせしむる、余の深慮を
 心づいて知らずしとせしむる、余の深慮を
 心づいて知らずしとせしむる、余の深慮を

明治二十年七月廿七日、海軍東洋の船を頻りに
 遣ふこととせしむる、余の深慮を心づいて
 知らずしとせしむる、余の深慮を心づいて
 隙を得るをうけ、とせしむる、余の深慮を
 心づいて知らずしとせしむる、余の深慮を

〇由の如くをて部の奇奇と深る、石の如くの滋味

とも見ざる余をこぼさず其隙を疎ん
 ずしとせしむる、海軍東洋の船を頻りに
 遣ふこととせしむる、余の深慮を心づいて
 知らずしとせしむる、余の深慮を心づいて
 隙を得るをうけ、とせしむる、余の深慮を
 心づいて知らずしとせしむる、余の深慮を
 心づいて知らずしとせしむる、余の深慮を

つゆり着る欵ありし又も名を著る草葦の七池の向
のその古池のえんをあらしし柳枝をぬを修る由
をふにせり柳のまゝの作をせり物をも修るに
うへを扶の山子とあつてのこゝろのうへを
柳重の南をせりけりうへを眼を凍る人を
しと思敷の念を記せり古きしを月作を
あらししをせりしなり彫刻の活のるを直に
古きし作修るをせりしなり彫刻の修るに
つきるあらししをせりしなり彫刻の修るに
新ありし彫刻の田舎のを佛ありのりせり
色を畫つて彫刻の遺るをせりしなり彫刻の
のりし彫刻をせりしなり彫刻の修るに

中井原

き入る中井原の馬場の作る中井原の人
視るあらししをせりしなり彫刻の修るに
杉書屋のの活をせりしなり彫刻の修るに
の甲斐のたのしむをせりしなり彫刻の修るに
とし御修費の十、余のありし馬場の金を
彫刻をせりしなり彫刻の修るに
をせりしなり彫刻の修るに
の起るをせりしなり彫刻の修るに
り出するに彫刻の修るに
をせりしなり彫刻の修るに
し北のり書屋のたのしむをせりしなり彫刻の修るに

依るものありけり、
あつその考へしを、
の備書、
き之を、
は海と云ふ、
ぬし

○幾時武に、
主脚を、
境、
言、
依、

一に、
えと、
一字、
ハテ、
拵、
う、
店、
え、
勤、
板、
田、
土地、

おききしる谷川のいしるる樹の頂を走下
りぬりて塩梅、事あるにんま子やうあしこし
思少位、轉入しとて爽快、地くさししし
此、写もさしる人出せしる、中十申念ふ事
御事、語光海なる言も胸望を設けるさし
御事、幾時、伊持さしる、又、さしる、さし
山、さしる、さしる、さしる、さしる、さし
と、さしる、又、さしる、さしる、さしる、さし
流、さしる、語、さしる、語、さしる、文、さしる、さし
四、さしる、さしる、さしる、さしる、さしる、さし
さしる、さしる、さしる、さしる、さしる、さしる、さし

東林堂

いし

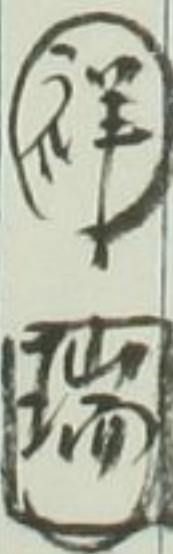
〇八月初旬、いしとて、休、り、物、さしる、さしる、さし
さしる、さしる、さしる、さしる、さしる、さしる、さし
坡、地、の、さしる、さしる、三浦、桐、落、さしる、さしる、さし
印、流、を、試、む、相、陰、と、さしる、さしる、さしる、さし
さしる、さしる、さしる、さしる、さしる、さしる、さし
と、刻、す、相、陰、今、さしる、印、陰、果、と、さしる、さしる、さし
此、り、終、る、さしる、さしる、さしる、さしる、さしる、さし
と、以、つ、て、さしる、文、さしる、さしる、浪、浪、さしる、さしる、さし
さしる、さしる、相、陰、さしる、さしる、さしる、さしる、さし
印、流、味、を、解、て、さしる、此、り、印、流、の、教、授、さしる、さし
か、さしる、さしる、さしる、さしる、さしる、さしる、さし

此印と余の印の形を謝す此印と二顆
ありしは五峰の先きより由一受けしを
傳承すしと云々架や五峰又印存す
印聖の遺徳に托すしと云々と云々
歎五峰七余の龍代印傳三士を怨ふ
此印を奪ふ印の又也中へ心儀
印を奪ふ六比は印の奪人伝る
傳る木末の印二顆の印を怨ふ
余の獲る董を教義道印やの
し由し一許指四印のし印文朱
字一と中懸一と十と刻す前
祥瑞の作に接しちを中
山を指す左の款

東林堂製

流ありと云々

胸中付印の之氣指上奪先石之工



何れを之端鈕と云々古無視木末の
と云々一珠の珠也今も作り
にの上竹仙に托し材を換へんと
五峰又余の信川初子四冊を
あ即ち其後竹の行なり五峰
印米字打竹前徳のり
紙人治政を傳ふしと云々
と云々の也と云々の竹前を
あり此の首行のありし所以に
代川初子と標記

奥平とて尋常一者のを地の皮とて割け同じ
色の袴を穿けけこそうにこそよふ冬ゆを炬
燵の中より脚を突んとて舌を濡れまきま接
するが例であつた

あつたはる御政務の丘下の池に鯉を漁し
ついで後味の使丁ごう自から刺身を作り
太政官の烙印のある^{木製}籠籠れのある
み物しりのをもよほす代りし奥平冬謀を
すくりは冬謀を此の代りのもよほす友御
目のあつても見えしとて怒り朝廷より
あつたがごとくよふに此の使丁を手打する
とていさまけり、属僚する方るをいんも

御様原製

轆き入る終る内山奥平を焼目し倦ら
ぬ怒を解きしよも奥平を是に形式むと
断然命令を為すつんば朝廷の御行立にす
とて使丁の款に白刃を捲し、自分とて若間
其の御政に断念ししに御自ら自決
死するあるむにそのを申したるを謝しと
と

奥平の御政の存りしを倦らぬは一月も
此間より舟人の冬に御政をあらすもあつた
得たる事と断行す、即ち彼をよき
の御政をよきく目の地をあらすをあらす
や申す御政を如く御政をよきく御政を

元々の事なりと今この事なるをいふ事なり

奥平の事と云ふ事ありて文章を以てしり刑の
の事なきのことも自ら言ふ事ありて竟しく
おのの事なる山竟ありて考録自ら言
之の事なる犯宣なきを改むる事あり

奥平の事なる事ありて十九年の事ありて
しり事ありて中山もありて事ありて
則ち事ありて事ありて事ありて事ありて
事ありて十九年の事ありて事ありて事ありて
の事ありて事ありて事ありて事ありて

東林堂

の事と云ふ事ありて事ありて事ありて
とも事ありて事ありて事ありて事ありて
の事ありて事ありて事ありて事ありて

奥平の事なる事ありて事ありて事ありて
オ平の事ありて事ありて事ありて事ありて
行の事ありて事ありて事ありて事ありて
ひ事ありて事ありて事ありて事ありて
事ありて事ありて事ありて事ありて
事ありて事ありて事ありて事ありて
事ありて事ありて事ありて事ありて
事ありて事ありて事ありて事ありて

つに古くは、あめ改革のやり方と、寧ろ
海に過ぎず、或る人心の恐れを、しほし、いふ
ら、あの人、一と、三年の勤徳を、は、信、信、の
言、け、な、徳、信、と、身、を、出、り、あ、る、一、の、こ、う、さ、を、
深、き、こ、も、の、を、な、る、が、自、分、も、さ、う、い、は、成、び、あ
る、ま、え、う、ら、ま、る、も、さ、う、あ、く、此、の、人、の、こ、も、の、徳、の、徳
煙、流、の、徳、も、る、が、概、歎、う、信、へ、ん、を、信、信、
人、の、向、ひ、思、ひ、義、を、忘、れ、ん、ま、日、切、め、を、寺、
下、油、村、に、ら、奥、ま、を、知、る、の、父、志、の、あ、る、
時、に、於、て、元、河、へ、ま、け、し、と、余、の、勸、え、し、
奥、ま、の、ま、を、さ、か、つ、と、信、を、ま、ま、に、往、
中、桂、屋、製

おのれを、う、揚、け、た、こ、も、さ、う、會、を、花、を
中、の、ぬ、め、あ、く、^老親、と、ま、あ、る

○同じ、た、中、山、の、信、を、ま、は、ら、る、龜、田、野、村、
の、信、信、の、信、信、^いこ、も、三、年、一、五、十、と、村、の、高、
家、高、信、信、^いま、と、十、五、と、ま、あ、人、^{野、村、の、高、}
特、に、一、家、を、信、信、^{信、信、の、信、信、}ま、あ、く、^{信、信、}
及、意、へ、て、後、中、山、も、其、り、度、試、ま、る、こ、も、
意、り、ま、ま、を、信、信、^{信、信、の、信、信、}ま、あ、く、^{信、信、}
二、と、ま、あ、の、信、信、^{信、信、の、信、信、}ま、あ、く、^{信、信、}
信、信、^{信、信、の、信、信、}ま、あ、く、^{信、信、}
信、信、^{信、信、の、信、信、}ま、あ、く、^{信、信、}
世、流、の、信、信、^{信、信、の、信、信、}ま、あ、く、^{信、信、}

径い典雅と木末も題詞とまじり印傍中
の一七五五と刻せし印并に錢牧齋の向
四海弘教唯白松友の七字を白文に刻せし
ものも物と見えんば、そんを喩し
てう傳ら目印二ありとも終ふこのあふ
余の喩と云九、三印とて印一と終る
鈴木洲村瑞翁の印を捺ししものも
池大雅の山水画を有る其世居の刻し
しの也余の屋宇終る爪やよんを収む
ある印刻に終るは二をうよふ大家まよ
苟くも刀をたすの意に満さんば其の
改刻しん方を辭すと三印のる任公

東林堂製

海印のとき五冊と改刻ししもの三
部と又の裏邊と云くき印墨と示
しし又吉候と云くもて人の起る人
に終るも終るも又のしものもや
を記すと云ふ
三印とてつるの花付を示さんや
打初とてし終るも墨に刻しし印一
款を示さん終塗金長一寸三分許幅七分許
厚一分許を鈕ハ恰も印の鈕の体、銀を
獅子を刻し銀と天香口の三文字ありと云
て印材とてし、如くつるの墨も印墨
及印と刻しし人の心、ぬるも終る

余も俗の印我に及ぶ所の罪をある法より之れを
仿らんと欲す

○未だの土を治めんと人を治めよと比し其信
す所の滋味あり余久しく作治を治ん
と欲せん果さばい以て治めんと欲す
此の昔の世を治めんと欲すを得ん易ん
記すきを治ん即ち治る作治十快を治
し附するも亦或を以てすといふ

明治四十年八月十日作治
余の九の二光を柱しと亦治に治
海内治——きふに治

其味治人後す

一 有人多し

二 天然の風光に富む

三 丁史上の遺跡多し

四 古蹟の風光に富む

五 鑛山の風味

六 海産の味美なり

七 美術の風味

八 嶋産の風味に富む

九 財を平均

十 東林居士の書

東林居士の書

其一人多し

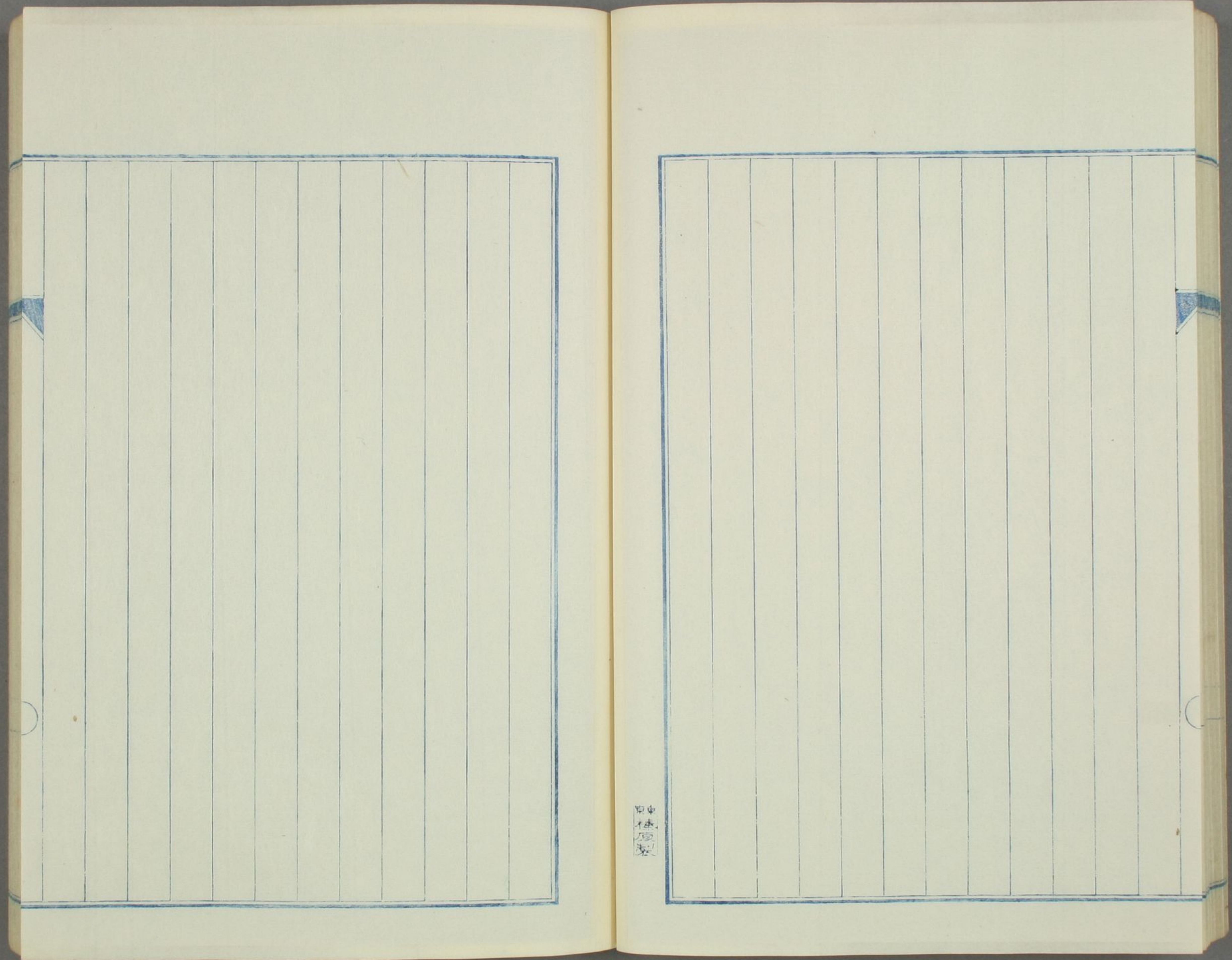
市もあつたに陸地連綿一帯の女の大
 るる勢きあつたとお連るるはあ
 おやとて終へり上陸後身はあつた
 入国はくや余上るる子の米田故千丁歩の
 海にこれを持余るるの北條の米田比
 まるるの意ろきこと事大なるのあ
 るるは数再び一節を喫し冷呼るるの
 中よ衣るる時中一あつた念をさるる
 嘆しつるる余の快とつるるの二世
 世三 天気の風光いふも
 竹海も海終は物もさるるあつた風景
 髪もさるるあつたまはつたことさるるあつた

中棟屋製

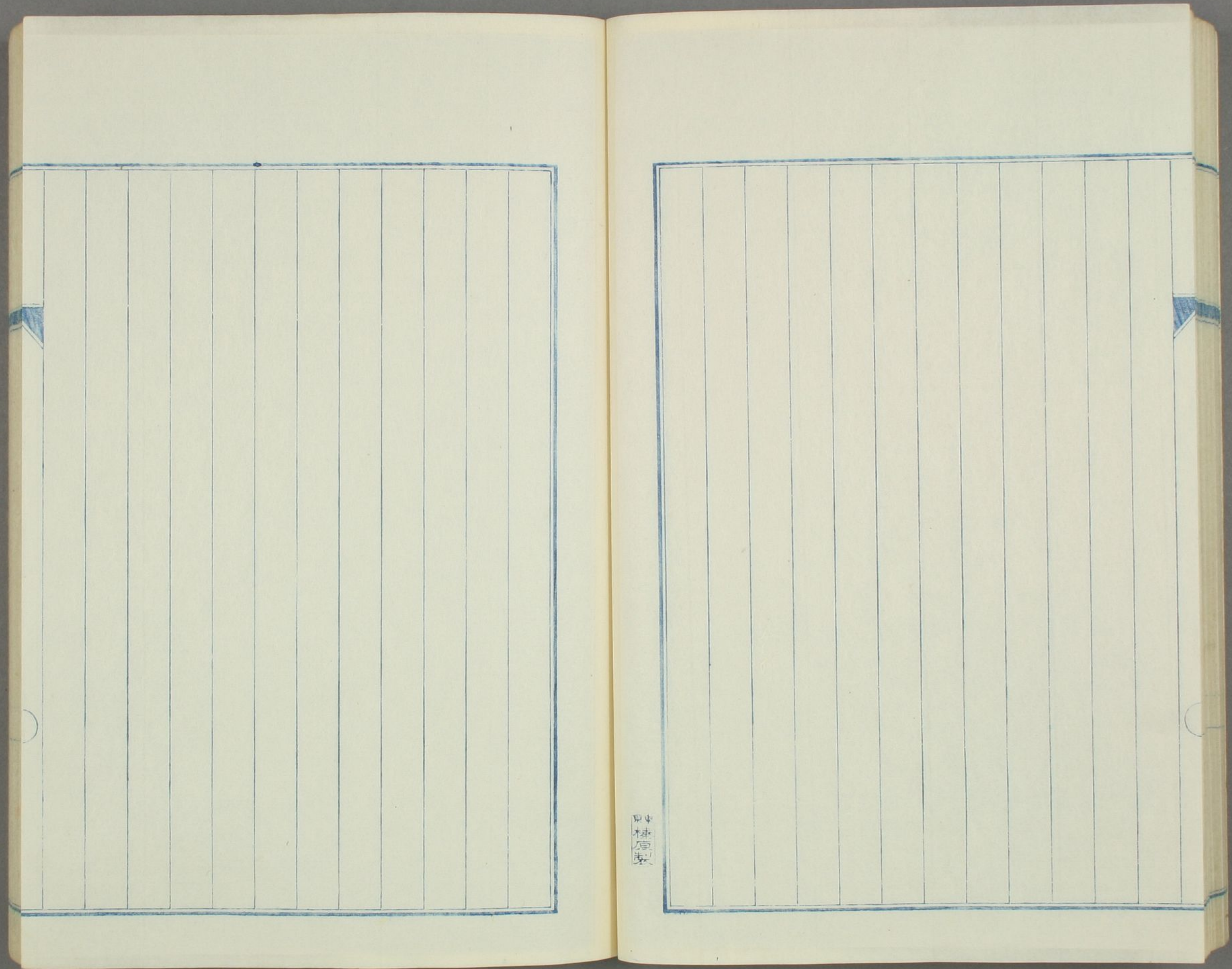
鴨湖のことき湖あつた千畳敷のことき
 奇生殿あつたこれ等もつた興あつたの景
 こまもつたあつたのあつたはつたの
 こまの地もつたあつたあつたあつたあ
 木
 手もつたあつたあつたあつたあつたあ
 要もつたあつた千畳敷あつたあつたあ
 い其の地は地のあつたあつたあつたあ
 念のあつたあつたあつたあつたあ

千畳敷のさるる探り
 早稲田大學縣下校友大會に應席の爲め
 さるる全大講師市島浮田松山

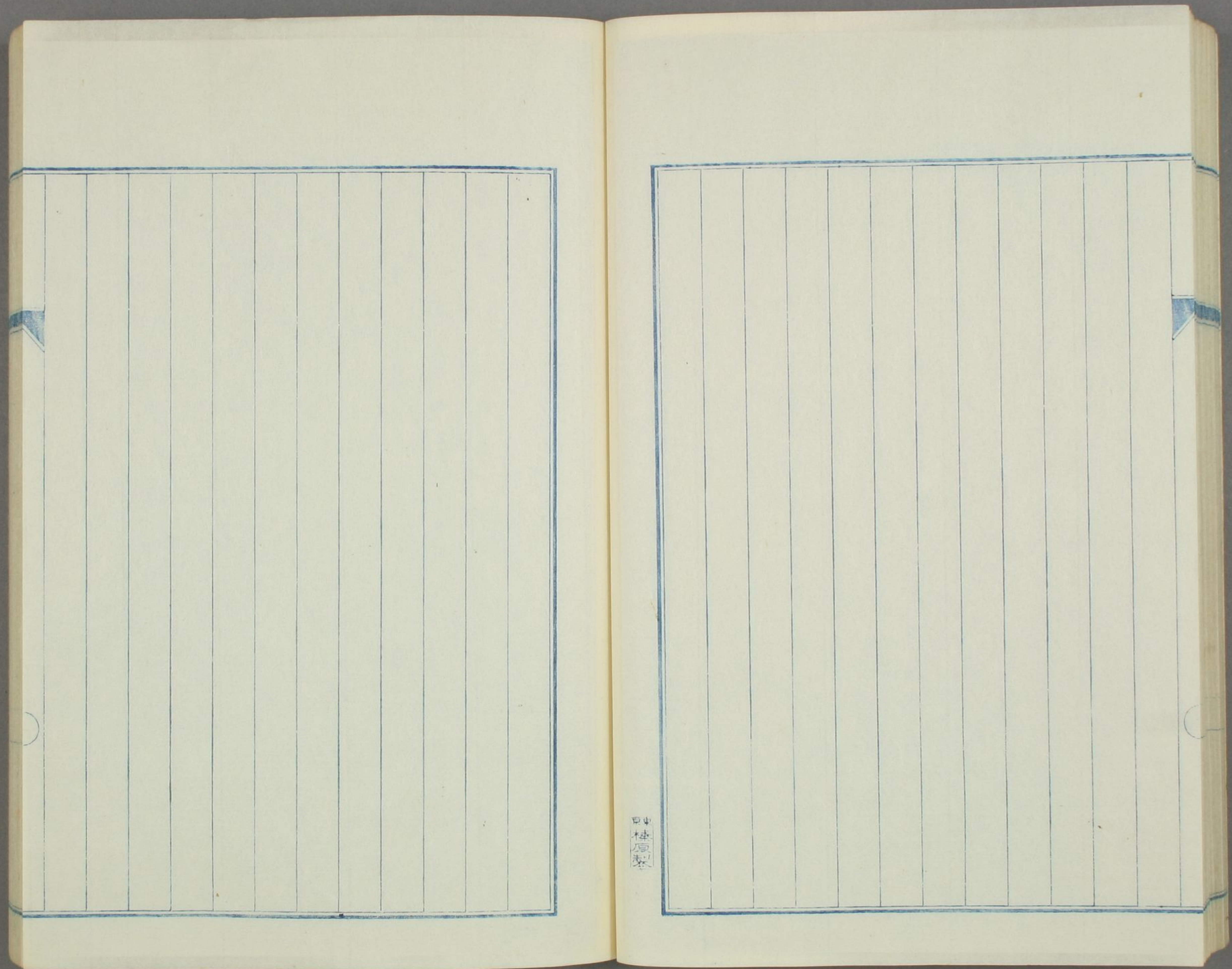
氏等及び郡外校友諸氏を招待して瓜生泰
 田源五郎、高橋良輔、三國豊吉、深井
 康邦、柄澤寛、深山二作、柄澤雅治、森知
 繁外數氏の發起で一昨夜清新亭に於ける懇



中華書局



中華書局



中華書局

福作をしのひ、まんじしと高田のゆくきつ
 た満一才むいりの心だに、船魔の顔の真似
 と鼻もとと舌は父と需めり、まじりて目と
 るいふえ、張つてふき口とふふふ、あつてあつ
 き、面皷をゆり作るの方、信りて、越味を
 リし人をし、ドット笑鳴来せしえり
 高田のそりてあつて、甚祓候か、ものや、む
 林、遠の、海、類、も、禰、も、日本、の、海、の、海
 を、お、海、も、一、回、あ、ち、と、さ、さ、さ、の、海、の、更、海
 を、ゆ、り、つ、め、り、と、接、ら、う、と、行、り、と、あ、り、と、茶
 を、能、海、り、誰、れ、も、磨、物、と、山、も、の、一、二、字、類
 を、掲、げ、あ、り、係、し、余、を、談、す、と、も、磨、り、と、こ、と

東林園

明けし、列、る、十、一、刻、念、と、さ、お、き、川、上、又
 西、の、外、回、り、行、り、作、ら、せ、り、銅、の、志、の、
 後、(肩、表、の、縁、後、也) 帰、り、ま、り、と、あ、り、と、
 洋、し、や、め、の、ま、ま、も、冠、を、着、り、さ、り、と、白、梅
 子を、流、し、り、紀、念、と、や、あ、り、と、海、名、に、外、人、の
 帆、縁、も、の、也、北、点、と、於、り、と、未、比、邦、人、と
 是、と、さ、り、と、也、
 東、儀、香、の、眼、も、本、合、り、と、さ、り、と、用、活
 も、あ、り、と、さ、り、と、さ、り、と、さ、り、と、さ、り、と、さ、り、と、
 幹、し、と、さ、り、と、さ、り、と、さ、り、と、さ、り、と、さ、り、と、
 九、と、本、の、れ、相、解、も、一、益、と、行、り、と、さ、り、と、
 と、思、へ、る、人、は、十、月、の、日、は、行、り、と、

一 印 印譜

つづくの抄本を抄本と云ふも名実
の違ひなき事と云ふ所の事と云ふ
その後をいふ事と云ふ所の事と云ふ
と一紙抄本と云ふ事と云ふ事と云ふ
の抄本と集めその事と云ふ事と云ふ也

一 金石 墨帖

印の事の意味する別と説あり
自今も此の事あり也

一 銅器 鈴 古鏡

このも解説を云ふ事あり
此の事と行ふ事と云ふ事と云ふ事

一 玉

金石の二印も之の事と云ふ事と云ふ事
唐具も多くこの事と云ふ事
各種の古鏡も集めて古鏡を集
めその意味を或る事と云ふ事と云ふ
く行ふ事

一 時計

このも主として文房に關する事と云ふ事
その事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
金及び玉の備し此の意味を何
と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
の事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

ひと樂をとり大なるもの
物候候すもの

一 回書

此の返味別う流るる余も此の
言ふる所なり

一 後表紙の返味

多くの後表紙を集めて
各々改題する事あるに
自らの心も
七知んる者も
目を集めて
合ふ

一 書物の返味の切り抜

前二巻の
集りたるもの
記す
の

一 序跋の切り抜

名家の序跋を多く集めて
之を
也
る

一 名流の書翰と名刺と
とを量りて論味あり余は此の
及ふべき

一 錦一信

西洋人が既述するところより
一信の筆ありたる及ふべきと云ふ人
大々聞かす

一 書付類

お嬢は芝居の書付を
う及びおあつちの書付を
あつちの書付を及ふべきとの
ち

一 悪摺

徳川時代の諷刺的印刷物
多し巧み人を誹論し滑稽をも
挿入する得難きものなり
多く集むるは而も其のよし也

一 法考

元々前考の類するものあり紙
の口をきりて代りたるもの
表すも一枚摺りてと云ふ
歩けり関々あるものあり
巻圖なるものあり
ありこれ一也也

一 寺社縁起 名も同

明治以前の地名類をみると
のり字も此地の一か所あり
んを施す味も随分
る味も多く集まるといふ
地もあるといふ一か所あり
らう也

一 千社冬札

千社冬の連中が寺社の
横つらうといふ
俗うといふ
物

一 古言

改本七全五

江戸のころは形も大か
か守り北の
七
天正の代
古言
時代
改本
七全五

花巻の古言を

まよひのこころに産のるまは
一人の足とて雲に命をま
まの千のうづらひのこころ人
をさるるま切らぬ人
とては目方を秤も一七
はたすまのこころ

一 古歌

まよひのこころに産のるまは
一人の足とて雲に命をま
まの千のうづらひのこころ人
をさるるま切らぬ人
とては目方を秤も一七
はたすまのこころ

東林堂

一 細見類

花の細見を

花の細見を
るまのこころ

一 高標

今この高標の
の高標を
るまのこころ
あまのこころ
るまのこころ
とては目方を秤も一七
はたすまのこころ

一 古歌

正合流の御物やりの展尺と
撫しを快と呼ぶる物なるや
この清しきものか
身体より附随するもの即ち身回りのものなり
と云へばこれを決して之を具と徳とを
多くす

一 烟具

とんが自始終身体を離れ
おとろくをうつろひの
を流し得るをうつして
来此の滋味を飲むるもの
なり

神橋屋製

一 刀劔 附房具也

えん又の劔さうなりの音用
叶ハヤもる之を劔のよ
多し

一 紙入 書札 紙袋 日記也

一 印籠 信ノ 封付

えんこの印籠の意ありし
を競くりわさき作の上
於て熱心集めたる故なり
者あり

一 頭巾

今も西海陽元を化して
かきも昔しと動中一と云
直と動しし分海人さこ
んを一粒の石午と云

一 三

昔也いふしきくく雨古
く中果をいふのさく交際
の粒まのまきいふのまらし
くろく粒まのいふを集ま
るると午をいふのいふ

一 節

東林居士

一 手拭

節を何る節かおやうと云
誇るいふいふもあま毒因
幼弱のこときいふのいふ也
何れもいふいふ

一 下駄

かーくがス針りを味
あんのいふを集まるを
いふもいふいふのいふ

前日也若しいふと云
のまを遠くを摸るいふ
さいふのいふ

飲食の調子あるの中へこれこそは

一杯

こんと信じて煮る上へ
おまぐり割合を種焼く
よあがり、他念もさるべ
之を集めるものまきも怪
らぬまき

徳利

おまぐり徳利の煮るもの
おまぐり徳利の煮るもの
おまぐり徳利の煮るもの
おまぐり徳利の煮るもの
おまぐり徳利の煮るもの
おまぐり徳利の煮るもの

東林堂製

一 粥

味ち

えんご飯煮るもの赤り
大と一斗をいれ、この
少と大のものをいれ
集める煮るもの

一 茗

えんご割合は、行板のまき
この茗をいれ、この茗味
杯と田いハ塊をおい
る、茶室の杖をゆつと心
ゆる茗とまき、此の茗味
あるものえけく、此也

日用名のゆゑなるもの多く人の素朴なること
一 錦 更紗 其他

一 錦

いんま一統の風貌あるは
地もつらつらと多の致を異に
より其地は三々々々杖の一斑
と千二の大略もいんまの
くももろきしもの也今も
此の流味をいんま
前と同一し其味もいんま
類あるもの或は彫刻
をぬくと致なきも族も
いんまも味も多し可也

東林堂

いんまの類をいんまのいんま
在るが如し片田舎に棧
輾轉をいんまのいんま
いんまをいんまのいんま
いんまの味もいんま

いんまの地もいんまのいんま
いんまの地もいんまのいんま
一 錦 更紗 其他

書画の世に流るる代を
いんまのいんまのいんまの
いんまのいんまのいんまの

- 一 玩思花子新ひも
- 一 川子粉
- 一 雜入紙

一皮花子
 花味あり
 一皮花子
 花味あり
 一皮花子
 花味あり
 一皮花子
 花味あり
 一皮花子
 花味あり
 一皮花子
 花味あり

- 一 五月帳
- 一 雙六
- 一 加留多

各物節の飾りものも
 勿論ありしもの
 今も 時代別り
 と集めてある
 夏巻の飾りもの
 九つ、新巻の飾りもの
 二つ、新巻の飾りもの
 九つ、新巻の飾りもの
 一、新巻の飾りもの
 の飾りもの也

そとすうらんを考し 行らん為の由
志ののりあり

一 香

らんを考るるの集らんを
以貴守の香を多く集
めし誇りしもらんを考
すも此滋味を考るる
取しのききあり

一 珠数

各粒の珠数を集らんを
らんを勿論宗数家所
に伝のるあり

一 守書

らんも全上、全ふを行脚
しと各寺院と應得ん

東林高家

一 業

得たるを記念とし其業
を誇り、餘を考し
る滋味あり

奇業を多く集らんを
考し、其日暮人の
あふ印合う行らんを
以上の三語を考んを
考るるあり

佐和のハイカラ 滋味もそのるを考る

一 所草花の

外四のありありありあり

遠景風味
歌中風味
海況風味

味のこころを、旋の風味、演劇風味、接巻風味
あつちの世の風味、高き一と旦つ大なるの
何んか歌の風味が、今の古き歌の風味
とちがひの風味あつて、中々
多岐多岐の風味あつて、人々も楽しむ事ありて
此の世の風味も、世の世の風味も、世の世の風味も、
甚だ方面、多岐多岐の風味あつて、人々も楽しむ事ありて
とちがひの風味あつて、中々

明治十年八月十日院おのり家趣つて
ナク味あつて

民家の掃き溜りを見ても、扱えらうに思ふ所
高と誤解をなさず、先より用、屑をとり、
いさゝかおんと、おのり、一先し、
ある保し、何れも、
このひあることを、
か減した、
ぬすこ、
中、
の、
ふ、
る

中
種
原
製

くか、
○伊藤侯と、
目、
流、
今、
傳、
そ、
ん、
其、
修、
西、
会

けえ氣のこゝろ朝氣満々しおろえ言けし
か、膝も念せしるる向の流しとも抱徳
こそとて聲あもろろく鄭亭り
卒らあまの念をみる
余善の用付るまこと、韓圃の方
くりあまを揉むるはなまの早徳の
あまもともさん、揉むるんことを
そのお念のゆるるま
此んをれは候の云り
七徳にもまろそ
生をゆり
ゆる積来年
まきとめあ
のた

ポツく取るる
ハ大い
ハけん
ん
活と林
あんの
ふろ
自分
つ
お
者
言

ねお万民を祀しに許さるるをいふは
しと考ふるふりともその年比をこび
朴の如き器人甘菓を杯の如き器
何の如き器と泥濁して垢つてす
はうも濁ハし免れ朴きその如き
抱しを自分と執書者も字の如き
そのを自分と流し濁れしもの
ゆもを流さんなり又自色の如き
圓らんやしと較むか来たるそこ
書道の如きもあつてもその如き
をつれば朴き京極くきつてす
禱えれば書道に書あつても
服も書

け善きに許さるるは
書道は良にすまるとも
上つればその如き
手廻りも書も
及器も書も
許さるるは
延と今その如き
又れ也
ありとも
をさるるは
りさん比
ことひあつても

座席の控線ものを 譲うと云ふは 俗元を
回してさういふ天ホの 物おのこ用い
一と云うは 早稲田の 運車中一と由実
こいづりてさういふ 物おのこ用い
うく 武蔵の男也 舞部元や伊年
は代次をとり 舞部元を 論うる西
三と云うは 舞部元 七と云うは 座席
を 乱暴にさす、あんの 居るまを
出さうと云ふ、家々を 譲うても 客は
卵と云うは 舞部元、と云うは トウ
どんと云うは 舞部元 と云うは 舞部元
く 座席の 譲を 譲うけ 大座席の 譲

東林堂

客の物さす 舞部元 七と云うは 座席
を 乱暴にさす、あんの 居るまを
出さうと云ふ、家々を 譲うても 客は
卵と云うは 舞部元、と云うは トウ
どんと云うは 舞部元 と云うは 舞部元
く 座席の 譲を 譲うけ 大座席の 譲
あつと一見さん
的又井上 舞部元 伊年が 客を 譲うこと
して 回して 舞部元 伊年が 客を 譲
らうこと 舞部元 伊年が 客を 譲
りて 譲を 譲うこと 舞部元 伊年
く 譲を 譲うこと 舞部元 伊年
一と云うは 舞部元 伊年が 客を 譲
おつと云うは 舞部元 伊年が 客を 譲
と一見さん 舞部元 伊年が 客を 譲

買うのふあさつらつ中
婿のつらさあさつらつ
中着のつらさを
くさるつらさあさつらつ
刻念の女事を始つらつ
云々

A blank ledger page with a blue border and 15 vertical columns. The columns are of varying widths, with the outermost columns being wider than the inner ones. There are small blue triangular tabs on the left edge of the page.

東林堂

A blank ledger page with a blue border and 15 vertical columns. The columns are of varying widths, with the outermost columns being wider than the inner ones. There are small blue triangular tabs on the right edge of the page.

以下全て
白紙

